



2020/12/1 No.85

発行者：社会福祉法人 ミッドナイトミッションのぞみ会
本 部：〒293-0023 千葉県富津市川名1436番地

幸福の実現に向けて



法人参与
中核地域生活支援センター
君津ふくしネット
センター長 島津 太

福祉とはなにかって今まであまり考えずに仕事をしてきた気がする。改めて福祉について調べたところ「福祉」とは全ての人の「幸福」を意味するとありました。社会を構成する一人ひとりが幸せならば、社会全体も幸せであり社会全体が幸せならば、すべての人が幸せなはずである。しかし現実には個人レベルと社会レベルの幸せが必ずしも合致するとは限らないと思われる。それを合致させるのは、非常に難しいがそれに近づけるために行政、社会福祉法人、民間企業、ボランティア等そして家族それぞれが福祉に対して取り組み、協働して推進しなければ成立するものではないと思う。

私の義兄はASL（筋萎縮性側索硬化症）を九年前に発症し、義姉は在宅期間中、介護のため五年以上自分のベッドで休むことはありませんでした。妻の身体を心配した義兄は自ら進んで国立箱根病院にて療養介護を受けることを選択しました。

九年前は多少の言語障害があったものの今では自発呼吸ができず人工呼吸器がなければ生命を維持できません。食事も経口食はできないので胃管により栄養を摂っています。

発声ができないためコミュニケーション手段はパソコンを眼球で操作します。それも間もなくできなくなりそう。最後は肛門の括約筋での操作となります。自分の体で動かせるのが眼球と肛門だけなので非常に辛い思いをしています。この病気は皮膚の痛み、痒みや脳の働きは普通の人と同じです。

自分の身体が全く動かすことができない義兄を健常な方は生きていて何が幸せなんだろうと思うと思います。そんな不自由で辛い義兄ですが先日九十五歳になる母あてのメールが届きました。

元気にしているか？食事はとれているか？食べたいものはないか？母の好きなウナギと餃子を送りますよ。相当な時間をかけてパソコンに向かっていたようです。私は正直なんて人だろうと思いました。自分が辛い生活をしているのにも関わらず母の心配をできることに驚いております。果たして自分がその立場であつたらそんな生き方ができるのだろうかと考えてしまいます。

義母も認知症が進み、今食べた物、今言われたこと直ぐに忘れてしまいますが、日中は高齢者のデイサービスに通い、毎日が楽しそ

うです。このように現在の福祉制度の中で義母も義兄も何かしらの幸福を味わって生活しています。現在の医療や介護制度には心から感謝しております。

家族の支援だけでは生活が成り立たない家庭も多く存在しています。「ミッドナイトミックス」のぞみ会」に課された業務はまさしく福祉を必要とする方々のためにあると言っても過言ではないと思います。

君津ふくしネットは、制度を知らない、制度を受けることができない方々へ寄り添いながら生きていて幸福を感じることができるような支援を行うことを目指して職員一丸となって対応しております。

新型コロナウイルスの影響で今年度は相談件数も激増し、職員の業務量も増加しておりますが、健康に十分留意して全ての人々が幸福になれるよう全力で取り組んでまいります。

実践発表四演題をグループウェアで配信しました

合同会社Tkt福祉経営研究所
代表 田島 誠一

九月二十五日開催を予定していた「望みの門実践発表会」は、新型コロナウイルス感染の拡大の中で中止になりましたが、同日四演題について

て発表の収録を行い、グループウェアで配信を行いました。

発表会中止に到るまでの経緯

昨年度は令和元年房総半島台風（台風十九号）の被害のため中止になりましたので、二年続けての中止となりました。今年こそは全施設事業所からの発表を目指し四月に開催要項を発表して準備を進めてきました。二十一日演題がエントリーされ、それぞれ発表の準備を進めていたところで新型コロナウイルスの余波がやってきてしまいました。苦渋の選択でしたが、利用者や地域のために開く発表会が感染を広げることになっては本末転倒であり集合しての開催は中止としたのでした。発表準備にあたってきた職員の方々ははじめ多くの方が残念な思いをされたことと思います。

発表収録

来年の開催に向け、つなげる企画としてグループウェアでの演題配信を行いました。実行委員会を選出した、東京望みの門マナの家、望みの門木下記念学園、望みの門学園、望みの門かずさの里からの四演題を九月二十五日午後収録しました。

二、四の発表者には紫苑荘多目的室に集合し、理事長、常務、実行委員等が見守る中発表しました。東京望みの門マナの家の発表者はZoomを利用しオンラインで発表しました。各施設の取り組みを基礎に内容のある発

表がされ、活発な質問もありました。また「密」を避けながらの発表会開催のあり方にも大きな経験となりました。

発表の内容

(1) 東京望みの門マナの家「退寮生の「実家」として、コロナに負けるな～マナの家を築いた後～」
として、コロナに負けるな～マナの家を築いた後～」

コロナ禍で退寮生が不安・孤独・孤立状態に陥っています。「実家」であるマナの家に来ることができないため、退寮生にコロナ予防の注意、助成金申請のお手伝いなどを記した手紙、マスクやお菓子を送った。退寮生からは「安心した」「知らない方からの支援が嬉しかった、お礼の手紙を渡してほしい」な

1	退寮生の「実家」として、コロナに負けるな～マナの家を築いた後～	東京望みの門マナの家
2	チームビルディングとリーダーシップ～リーダーの役割～	望みの門木下記念学園
3	一斉の「ごちそうさまでした」をやってみました～食事スタイルの自由化～	望みの門学園
4	非措置児童虐待防止・不適切なかかわり防止プロジェクトの実践～かずさの里スマイルプロジェクト～	望みの門かずさの里

ど声が寄せられました。これからも「実家」としての役割を果たしていきます。

(2) 望みの門木下記念学園「チームビルディングとリーダーシップ」リーダーの役割」
初年度一斉に入所してきた子どもたちの支援に困難が生じ、入所を止める事態となってしまいました。この状況から脱却し、職員チームを再建するため、「協働」を意識したチームの形成に取り組みました。この結果個々の力に頼るのではなく、みんなで子どもたちを支援することができるようになりました。

(3) 望みの門学園「一斉の」ごちそうさまでした」をやめてみました。食事スタイルの自由化」

全員がそろってから「いただきます」をして食べる食事スタイルを変えた試みです。六十分間の食事タイムを設定し、好きな時に好きなテーブルについて食事ができるようにし、自己決定の機会を設けました。配膳されたテーブルに着くのではなく利用者各自が盛り付けるようにしました。個人の尊重に基づいた改善となりました。

(4) 望みの門かずさの里「非措置児童虐待防止・不適切なかかわり防止プロジェクトの実践」かずさの里スマイルプロジェクト」
入所児童の主体を確立する目的で設置している「スマイルプロジェクト(S.P)」の報告。各ユニットから選出された児童一名が毎月集

まり、暴力のない暮らし、心地良い生活、暮らしのルール、行事のプランなどについて話しあいをしています。S.Pによって児童の主体性の高まりが生まれ、子どもへの理解が職員間で統一することができてきています。

まとめ

どの発表も、利用者中心の視点に立ち二に正面から真摯に取り組むことが反映されたものでした。目の前の問題に目を奪われず将来の問題にも目を向けた発表や、これまで当たり前だと思っていたことを思い切っって見直し成果を上げた発表がありました。「失敗」の教訓に学び仕事の仕組みを変える試みや、ケアされる側の自己決定や主体性について深く考えさせられる発表がありました。講演の仕方やスライドの作り方、発表時間の厳守など、小さな問題はありましたが、技術的な問題は改善が可能です。発表に臨む基本的な姿勢が確固したものであったことは素晴らしいと思えます。より科学的に内容をより分かり易く発表することを目指すことが課題と言えましょう。

そもそも、実践発表会は望みの門の理念を実践の場で実現していくために開催されるものです。現場で行われている実践の成果を法人全体で共有することを目的としています。それぞれの現場では改善が積み重ねられています。できること、やれることの範囲で考えているだけでなく、利用者・家族・地域の二



ズに基づいて挑戦する姿勢が求められます。小さな改善の積み重ねや、勤務状況の改善などを共有することによって、私たちの提供するサービスは磨かれ進化するからです。

できること、やれることの範囲で考えているだけでは前に進むことはできませんし、前に進まないということは社会の変化や利用者等のニーズの変化についていけないことになってしまいます。来年度は、一同に集まった発表会の開催が望まれますが、万一コロナ禍が収まっていなかったとしても、今回の経験を生かしてオンラインで開催することができると良いでしょう。

日々の業務の中で、「もっとよくしたい」「(楽)したい」などと仕事を見つめましょう。実践発表会で発表することが最終目的ではありません。発表につながる実践の積み重ねこそが大切です。

来年度からと言わず、今から実践を振り返ってまとめることを継続していただきたいと思います。学習する組織を目指しましょう。望みの門の基本理念である、福祉サービスを受ける人の人格と権利の尊重、適切な福祉サービスの提供、科学的根拠にもとづくサービス、福祉従事者としての資質向上、地域社会への貢献、先駆的福祉活動と情報の発信の実現のために実践発表は不可欠の取り組みです。

東京望みの門 自立援助ホーム マナの家 不安を感じる能力が人間の証明

生活指導員 尾家 美穂

ニュースでは毎日、新型コロナウイルスの新規感染者数が増え、世界の感染者数の増加も歯止めがかりません。二〇二〇年の年末は、大きな第三波が押し寄せられる中で迎えます。全世界が同時に同じ脅威に晒され、世代に関係なく誰もが初めて体験する未知への不安。今年四月の緊急事態宣言時は、学校も会社も休業になり、街は閑散としていました。

商店街もシャッターが降り、渋谷駅の交差点ですら歩く人もまばらでした。

夕方の帰宅ラッシュ時に乗り合わせた渋谷発の電車も、一両に私ひとりだけ。『ソーシャル・ディスタンスの取り過ぎでしょ!』と思いつきながら席に着きましたが、三駅先まで誰も乗ってきませんでした。長く利用していて、こんな事も初めての体験です。自粛期間に外出している事への罪悪感をマスクが隠してくれています。

マナの家のルールや寮生活も変わりました。帰宅時の手洗い、消毒、マスクはもちろん、三密を避ける為、食事もし一緒に食卓に着く事を控え、時間もお互いずらしています。毎月あったオープンハウスや支援者の集まる手仕

事も中止。学校も仕事も休みで、誰もが自宅にこもりっきりの日々。人づき合いの苦手な寮生には好都合ですが、ストレスで不安は増大しています。夏に緊急事態が解けると、少しづつ街にも人が戻り、アルバイト先からも声がかかる様になりました。

しかし時間も日数も削減され、自活の道には程遠い状態です。ただでさえ不安定な年頃の寮生たちにとって、こんな状態で心穏やかにいられるはずがありません。寮生同士の会話も少なく、どこかギクシャクした日々は今も続いています。ある生物学者の話では、人類は進化の過程で不安を感じる能力を身につけたと言います。

…だとしたら私たち人間は死ぬ迄、いつも何らかの不安を抱えながら生きていく事になります。しかし不安こそが、危機を察知し回避する能力、新たな事に挑戦する能力を育てる原動力になるのも確かです。神様は同時に

人類に不安を克服する能力も備えてくれています。寮生は心配に寄



り添い、自力で払拭する力を育てるのも私たちの大事な仕事だと感じています。今も不安の中で患者に向き合い、新型コロナウイルスと闘ってくれている医療従事者の皆様に感謝します。

婦人保護施設 望みの門学園

一斉での「馳走様をやめました」 ～食事スタイルの自由化～

栄養士 志保沢 沙也加

望みの門学園は、今から五十八年前に女性の更生保護施設として創設されましたが、時代も少しずつ変化し、利用者主体の支援やサービスを提供する場として様変わりしました。しかし、食事スタイルに関しては、現在に至るまで変化することはなく、職員が配膳をすべて完了した後に、集合の合図の鐘を鳴らし、全員が揃うのを待ち、御言葉・賛美歌の後食事開始となっていました。食

後も全員の食事が済んでからこ



馳走様をするため、食事が早く済んだ方も席から離れられず、ゆっくりと食事をされる方は、最後には急かされるように食事を終えていました。そのため、今回利用者の状態や時代背景を加味し、食事スタイルを見直すこととなりました。

利用者の食事時間の個人差が目立ち、落ちていた満足する食事ができていませんでした。そのため、一定の食事時間を定め、その時間内なら自由に食事ができるよう変更しました。

朝食開始時のみ、皆で集まり、御言葉・賛美歌を継続していますが、皆さん以前に比べ、落ち着いて食事ができているように思います。また、食事の席も指定ではなく、自由に選べるようにしました。主食や汁物もセルフサービスにし、温かな状態での喫食ができるようにしています。

朝食では、主食をパンかごはんで選択できるようにし、ジャムやふりかけも選べるようにしました。

施設という環境だと自己決定の機会が失われやすいですが、一日三食の食事の中で、利用者個人が選択する機会が増え、受動的な食事から能動的な食事へと変化することができたのではないかと思います。

今後利用者への思いに寄り添い、より個人が尊重される環境づくりに施設全体で取り組んでいきたいと思っています。

養護老人ホーム 望みの門楽生園

心機一転

支援員 伊藤 利明

私は望みの門新生舎・就労支援B型事業所に十月まで所属していました。私は幼少の頃に友達に障害を抱える方がいて、障害は個性と考え特別な意識をすることなく利用者の方々と一緒になって働いていました。十一月から人事異動で養護老人ホーム楽生園に所属する事になりました。

私は介護福祉士の資格は持っていましたが介護の現場で働いた事はありません。元々私が介護福祉士を取得した理由は、父親の介護でした。私が中学生の頃から二十歳半ばまで父親の介護をしていた事がきっかけです。父は過労で身体を壊し入退院を繰り返していました。中学生だった私は通院に付き添ったり、着替えを病院に持って行って渡したり、家にいる時は入浴で身体を流したり、薬を飲む手伝いや、外出する時には車椅子を押していました。長い年月に渡る家族の介護を経験し、介護福祉士を取得しました。

現在では母親が介護を必要としてきています。超高齢化社会と言われる介護必要不可欠な時代です。私は幼い頃から介護必要不可欠な環境で育ちました。今では社会問題となっ



ています。望みの門楽生園は、養護老人ホームという施設で調べるとこのように記されています。

六十五歳以上で、身体・精神または環境上の理由や経済的な理由により自宅での生活が困難になった方を入所させ、食事サービス、機能訓練、その他日常生活に必要な便宜を提供することにより養護を行う施設です。身の回りのことは自分でできる方が対象であり、自立した生活が継続できるよう支援する。養護老人ホームは、経済的に困窮している高齢者を受け入れる場所です。そのため介護施設という扱いではなく入居者が自立した生活が送れるよう支援するとあります。改めて考えると新生舎に所属していた時と近い心構えで利用者様の自立に向けた支援をしていきたいと思っています。



特別養護老人ホーム 望みの門紫苑荘

紫苑荘のこのごろについて

事務員 藤原 菜々美

十一月二日より、コロナウイルス感染予防のため長らく自粛していた面会を再開いたしました。ご利用者様、ご家族様にはご理解とご協力いただきありがとうございます。

マスクの着用、透明なシート越しではありますが、徐々に家族の顔を見ることができたと利用者様が面会後に嬉しそうに話して下さったり、なかには涙を浮かべて会えてよかったと喜ぶ方がいたり見ているこちらまで嬉しくなります。それと同時に、やはりご家族様からご利用者様がいただけるパワーは、毎日いる私たち職員とは比べ物にならないのだと実感しました。

感染予防のため外出等に制限があるなかではありますが、私たち職員もご利用者様に喜んでいただけるように工夫を凝らしております。敬老会では様々な仮装をした職員とともにカラオケを楽しみ、運動会では赤と白の鉢巻きを巻いてパン食い競争や玉入れに白熱しました。他にも外食ができない代わりにウナギや天丼を出前で注文したり、秋には焼き芋を、ハロウィンには大きなカボチャのタルトをみんなで切り分けたりして楽しみました。

いつもは食が細いご利用者様でも、美味しくそうな食事を前にしてきらりと目を輝かせ、べろりとすべて食べていらっしやっただのが印象的です。

特に焼き芋

は大好評で、ご利用者様からまた食べたいもっと食べたいという声もあがっているのので、近いうちにまた企画しようかと思っております。

十二月に入ればクリスマスが近づいてきます。ツリーを飾り、きらきら輝くオーナメントでフロアを装飾してクリスマスモードを盛り上げていけたらと考えております。二十三日には別々のフロアではありますが施設内でのクリスマス会を企画しており、レクやプレゼントでご利用者様に楽しんでいただけるよう、職員一同精一杯取り組んでいきます。

コロナウイルスの終息までどのくらいかかるのかわからず、ご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、どうぞよろしくお願いたします。



特別養護老人ホーム 望みの門 富士見の里

新たな取り組み

介護員 小林 逸美

のぞみ会に入り八年目となりましたが、今年はいつもと違う年となりました。特に新型コロナウイルスの影響にて毎年恒例の春と秋の遠足や誕生会のご家族様の招待の中止、そして何より利用者様が楽しみにしているご家族様との面会が中止となっています。

五月後半に非常事態宣言が解除され、七月には人数と時間制限を設けて面会を再開しましたが、感染者の増加から八月には再度面会の中止となってしまいました。

利用者様もご家族様も「こればかりは仕方のない事です」と理解や納得はされていましたが、どこか寂しそうにされており、少しでも利用者の皆様に元気を出して欲しいと思ひ、日々の声掛けや傾聴はもちろんですが、天気の良い日に施設の周りの散策や、畑で芋ほりのお手伝いをして頂くなどで少しずつですが笑顔が見られる事が多くなってきました。

そして、利用者様ではなくご家族様にも出来ることは無いかと考える様になり、「様子はどうですか？変わりはありませんか？」の電話が多くなって来ている事から新たに取

組み始めたのが、ご家族様へのメッセージカードの作成です。毎月、職員が利用者様の様子を書いたメッセージカードをお送りし「誕生日プレゼント



に持って来て下さったぬいぐるみを誕生会の時に渡し、とても喜んでいらっしました。「おしほりやエプロン畳みを積極的にお手伝いして下さい」大変助かっています。新入居の方のご家族には「施設での生活も慣れ仲の良いお友達も出来たようで笑顔で談話されています」等を記入しています。また、写真の同封や字の書ける方にはご自分でご家族へのメッセージを書いて頂いて「なんて書いたらいいか分からないよ」「恥ずかしい」と言いながらも思い思いのメッセージを書かれています。

ご家族様からの反響もあり「写真で元気な姿を見る事が出来て良かった」「メッセージカードを読んで元気そうで安心した」等の声を貰い我々も大変うれしく思いました。これからも利用者様は勿論ですがご家族様にも

安心して頂ける様に色々な事に取り組みしていきたいと思ひます。

老人デイサービス事業 望みの門 デイサービスセンター

私が介護の世界に入った理由

介護員 平野 美智代

娘が小学五年生になり、手がかからなくなった頃、近所のヘルパー初任者講習の看板に目が留まりました。初めは介護職に入る予定はありませんでしたが、その施設でボランティアを三週間するうちに興味を持ちました。デイリハ、訪問介護を経験すると、特に訪問介護の面白さに気が付きました。資格試験にも挑戦しました。これは、部活だけに夢中で勉強をそっちのけの娘に母の背中を見せる意味でしたが、効果はありませんでした。訪問介護の現場で学ぶことは多かったです。高齢の女性宅では、料理のコツを教えてくださいました。自立支援のもと、煮魚などの合わせ調味料はなるべくお客様にお願いしました。しかし、別のお客様宅で鯛一匹が出て「高級なお魚をいただいたからお願ひ。」と言われた時は驚きました。料理屋さんのようにできないこと、我が家では鯛一匹を調理したことが無い旨を説明しましたが「平野さんのやり方がいいの。」と譲りません。訪問へ

ルパーになりたてだったため、苦勞した記憶があります。心の中で、「ごめんなさい」と言っていました。

娘が大学になり、手が離れ、これまで以上に時間ができ、働く時間を増やしました。自宅から少し遠い施設（小規模多機能）に異動しました。なじみの職員により、通いと訪問と泊りを柔軟に提供するところです。数年間勤務したところ、コロナ騒動が起きました。下宿していた娘も自宅に帰し、両親の老いもあり、日中時間帯で働かせていただけの現在の職場でお世話になっていきます。のぞみ会に入職して二か月。慣れないことも多く、覚えることもたくさんありますが、周りの方々に助けていただき、現在に至っています。

お客様の将来や、こうして暮らしていきたいという今後の希望に少しでも寄り添えるよう、私も含めて、お客様が一日のうちひと時でもほっこりできる時間が持てたらと思っています。

訪問看護ステーション 望みの門訪問看護ステーション
猫とわたし



訪問看護員 村上 淳子

三十年住み慣れた館山から君津に転居すると共に、当訪問看護ステーションにお世話に

なり四年目を迎えました。



入職当時 は社会福祉法人の事業所と言う事で 医療法人の事業所と勝手が違い、いつもの顔が見える主治医との連絡が取れない難しさを 感じ戸惑いが大きかった様に思います。

また法人の抱える事業所の数の多さと行事の際の結末感には圧倒されました。始めは宗 教心のない自分にキリスト教の法人で仕事を して良いのかと不安がありました。が、慈愛に 満ちた職員の皆様に支えられて現在も仕事を させて頂いています。

現在は一人暮らしで二人の息子達はそれぞれ 独立して、二十四時間自分の時間を満喫し ています。去年までは十二歳のシーダックス 犬一匹、十一歳の迷い猫二匹との穏やかな生 活を送っていましたが猫二匹が相次いで亡く なり、猫の気ままだけどフアフアで抱くと柔 らかく暖かい存在が居なくなってしまい寂し い思いでした。

今年の九月に縁あって四か月の子猫姉妹二 匹を引き取りにぎやかな生活がスタートしま したが、気候の変化と共に子猫達は次々と嘔

吐や下痢で動物病院にお世話になり猫部屋の 保温と室温管理の大切さを痛感しました。暖 かい館山で野良猫を育てた時とは大分様子が 違うので、三十数年ぶりに子供を育てる気持 ちで接しています。

子猫達を見ていると常に一緒に行動して、 室内犬にも立ち向かい傍若無人に自宅内を走 り回りたいずらしますが、何と言ってもその 愛らしい動きと屈託のない顔が愛おしく癒 されます。

自分の年齢を考えるとこの子達で最後の ペット。最期まで看取れる様自分でも健康的 に過ごし元気に仕事を継続出来ればと思っ ています。

就労継続支援事業 望みの門 新生舎
共に年を重ねていくこと

事務員 妻木 真希

のぞみ会に就職し一年八か月が過ぎました。 事務員としてですが、初めて福祉の仕事に 携わる事となり当初は色々不安に思った事 を思い出します。その時に森施設長に言われ た言葉が「利用者様と一緒に年を重ねる」と いう言葉です。

慌ただしく日々の業務をこなすのが精一杯 だった中、昨年新生舎は二十周年を迎えまし

た。記念行事を目前に控え、令和元年房総半島台風により新生舎も停電の大きな影響を受け利用者様を全員受け入れる事が出来ず一部グループホームの利用者様のみの出勤。

水が出ない中水くみ等通常では無い作業を利用者、職員が一丸となって通電までの間協力をして作業に取り組みました。

そして迎えた二十周年記念行事。

改めて家族会の皆様、地域の皆様との繋がりを、法人各施設の協力を得ながら二十周年を迎えることが出来た事なのだと感じました。

そして法人内、新生舎の各行事を通して利用者様と共に過ごす中で新たな面を発見する事もできました。

しかし、今年に入ってから新型コロナウイルス感染症。政府の緊急事態宣言により利用者様の通所は全面停止となり改めて利用者様の皆様の働く力が必要な事。また、利用者皆様に会えない寂しさを感じました。

様々な場面で利用者様と時間を共有し



ていくうちに「共に年を重ねる」という言葉の意味を考えるまで歩みを進められてきたような気がします。

時間を共に過ごしていく中、新生舎の様子も段々と進化しています。

中庭には作業で洗濯物を干す事の出来るデッキを設置しました。雨が降ると大変だからと雨どいからビニールの雨よけまで設置し、消毒する場面が増えた為使い易い易い消毒台を作成し、作業がしやすい為にと柵を新たに作成・設置をしてくれたのは施設長です。

新生舎の一部として進化した便利な物も利用者と共に年を重ねていく為のツールであると感じています。

今後色々な事を教えてくれる利用者様。正確な作業をコツコツこなしている方やコロナ感染症対策で新生舎内の消毒作業に携わっていた利用者さんが、職員が大変そうだからと進んで消毒の場所を広げてくださっています。

自主的に自分からやれる事をやろうとする利用者様の皆様に恥ずかしくない様私自身もしっかりと勉強をしながら日常の業務に取り組み、利用者様と「共に年を重ねて行ける」よう頑張っ行って行きたいと思っています。

自主的に自分からやれる事をやろうとする利用者様の皆様に恥ずかしくない様私自身もしっかりと勉強をしながら日常の業務に取り組み、利用者様と「共に年を重ねて行ける」よう頑張っ行って行きたいと思っています。



世話人兼生活支援員 三幣 知子

グレースホームに異動となり一年が過ぎました。日中活動を担当していた私としては料理を初めとして生活面を支援する仕事は初めて戸惑うことが多かったです。

グループホームの利用者さんは十代から七十代と幅が広く全員同じ支援と言う訳にはいかないのですが、本人の出来るところはできるだけ手を出さず、難しいと思えるところに少しの手助けができれば良いかなと考え奮闘しています。

この一年は今まで普通に行っていた行事や旅行・帰省などが当たり前でなくなった一年でした。「コロナ」の言葉に職員・世話人は感染予防に努め、利用者には外出を制限されるなど我慢が現在も続いています。

それでも利用者さんは文句も言わず「今日も感染した人〇〇人だ。気をつけなきゃね。」「感染する人が少なくなったら面白い物に行けるね。」など、希望を持って話しをする姿に救われる思いです。

毎年の行事を楽しみにしている皆さんに外に出なくても楽しいことができなにかと知恵を絞り、お花見・お楽しみ会・BBQと現状

に合わせた内容で行ってきました。初めての試みの夜のBBQ大会は、花火も行い利用者さん、職員共に楽しい時間が過ごせたのではないのでしょうか。今後も色々な場面で、「今までと同じ」ができない事があると思いますが、頭を柔らかくして今できることを精一杯頑張っていきたいと思います。



富津市富津地区地域包括支援センター 介護保険サービスについて

介護支援専門員 飯沼 久美子

地域包括支援センターは①介護予防ケアマネジメント②総合相談支援事業③権利擁護④包括的・継続的ケアマネジメント支援事業を行っています。職員構成は社会福祉士二名・主任介護支援専門員一名、看護師一名、介護支援専門員一名、事務員一名の計六名です。ミッドナイトミッションのぞみ会が富津市か

らの委託を受け運営しています。

私は介護支援専門員ですので、主に介護予防ケアマネジメントを行っています。(介護保険サービス利用の為のケアマネジメント) 包括支援センターは介護予防事業所の為、支援の方のみケアマネジメントを行っています。要支援一・二の認定を受けた方の介護予防ケアプランの作成や効果の評価、現在介護保険サービスを担当している利用者数は約五十名です。

サービスを利用している方に、ご自宅まで利用票を届けて、健康状態をお聞きし、サービスの変更・追加のお話を伺っています。

新規の方には介護保険の説明やサービスの種類(訪問介護・訪問リハビリ・訪問看護・訪問入浴・デイサービス・通所リハビリテーション・福祉用具貸与・住宅改修・福祉用具購入等) 利用開始までの流れなどの説明をしています。

サービスに繋がらない方や、サービスを終了した方のご自宅を定期的訪問して、近況



を伺ったりしています。

また介護保険を申請したいけど、どうしたらいいのか分からないという方には、申請書類の記入のお手伝いや申請の代行、認定調査に立ち会う方がいらっしゃらない場合は、調査の立ち合いも行っています。

介護の事で心配な事や不安な事が有りましたら、いつでも相談して下さい。

児童養護施設 望みの門かずさの里 里に着任して

保育士 古宮 侑生

私は里へ着任し、新任職員の緊張感とコロナ禍による様々な対応・動きに戸惑い、気づいたら半年間が過ぎていました。その中で少しずつではありますが、業務の流れ・子どもたちとの関わり・職員との連携などを理解できるようになりました。まだまだ半人前ですが仕事への満足感・充実感を少しずつ感じています。

半年間の日々にて改めて、私はこの仕事にとっても強い思いを抱くようになってきました。それは子どもたちと関わっていく中で、本当の親にはなる事はできないものの、親が果たすべきだった役割を代わりとなって彼らに注ぎ、成長を見守っていくことです。言葉で言

う事はとても簡単な事です、実際に一緒に生活をしてみるととても深く広く、非常に厳しい仕事であると日々感じております。同時にやりがいを感じなければ続けられない仕事であるとも感じております。



業務の面では、先輩方の指示を待つ事がまだまだ多いですが、次の半年間は自発的にどれだけ取り組んでいけるかが課題とと思っています。子どもたちとの関わりの面では、子どもを第一に考えるのは勿論ですが、この子にとって何が適切な対応であるのかを常に考え、一人ひとりの子どもに沿った関わり方を自身の中で模索し見つけていきたいと思っています。分からないことを積極的に聞き、自信のないあやふやな状態を減らしていけたらと思っています。そうする中で自発的に取り組む場面を多くしたいと考えます。

先輩方とは様々な経験や子どもと一緒に過ごした時間が全然違うことを前提に置き、運動が得意な私は、体力にも自信があるので、

より多く遊んで関わっていききたいと思えます。より多く関わって行く中で、子どもたちの声を聞き、気持ちに寄り添ってゆけたらと思います。

一人ひとりをよく知り、理解しながら、子どもたちが安心して安全な暮らしができるよう、まず私自身の成長に努めたいと思います。

乳児院 望みの門方舟乳児園 コロナ禍の中で

保育士 榎本 一代

今年は新型コロナウイルスという感染症の流行で外出自粛の生活が続いています。職員は勿論の事ですが、方舟の子ども達だって例外ではありません。

何時もなら四月には花見で公園へ出かけ、五月は動物園。六月、七月には近くの公園や図書館に行ったり、外食をしたりと楽しくすごしていました。去年のハロウィンには富士見の里に行きお菓子を頂いて来たり、法人の運動会やかずさの里の感謝祭に出かけたりと法人内の交流も行っていました。

でも今年はその計画も立てることすらできません。天気の良い日は外遊び、園の周りを散歩して、代わり映えのしない毎日が過ぎていきます。

そんな毎日ですが何とか子ども達に楽しんでもらおうと園の中で色々な企画をたててみました。夕涼み会では何時もは食べないような手羽が出たり、焼き鳥をかじったり。天気の良いお昼には外で焼きそばを焼いて食べた、外食出来ないからデリバリー。十月には縁日を企画しました。浴衣を着てヨーヨーつりをしたり、スーパーボールすくいをしたり子ども達の歓声が聞こえ職員も一緒になって楽しみました。

そして今計画なのが七五三です。今、幼児室の子ども達は全員三歳です。つい先日巷では晴れ着を着て七五三のお参りをする様子がテレビのニュースで放送されました。勿論方舟の子ども達だって三歳だから七五三をやりたいでしょう。

でも、巷のみんなとは一寸だけ日にちをずらして行ないます。子ども達一人一人に晴れ着を買って、当日は写真を沢山撮ってアルバムを作っています。



お祝いのお食事は、お赤飯にしてみました。う。おひねりに職員からお菓子を貰って食べましょう。…なんて、楽しく思い出に残るような七五三にしてあげたいと思っています。

コロナウイルスは怖い病気です。感染力も強く方舟の子ども達にもどんな影響があるのか不安です。そんな中で、私たち職員も精一杯子ども達を守っていきたくと考えています。

不安と苦手



児童家庭支援センター 望みの門 ピーターパンの家

心理相談員 齋藤 美紀

皆さんにとって高校受験とはどういうものでしたか？私は、受験に落ちて高校に行けなかったら人生が終わる。そんな風に思っていました。中学生の私には一度の受験がとても大きな壁でした。ピーターパンの家では受験生と関わる機会もあるため、その時のことを思い出します。子どもの頃は大人が整えた道を歩いていけばよかったのに、いつの間にか分岐点にいて、自ら選択しなければいけない。漠然とした「不安」の中を、どうにか気持ちを取り戻したり発散したりしながら折り合いをつけて生活していかなければなりません。この「不安」というものは厄介なものだと思えます。「不

安」を敵にすることなく、上手に付き合っていきたいものです。



大学生の頃、人間が瞬間的に記憶できる(短期記憶で保持できる)情報の最大数は七十一(五〇九桁)であると習いました。その講義の中で、スクリーンに一瞬だけ映し出された数字の羅列を記憶し、それを答えるという時間がありました。その時私は短期記憶が苦手であるということを知り、やっぱりそうだよねと思いました。自覚があったからです。小学生の頃何かの行事で伝言ゲームをしたことがあるのですが、緊張して頭が真っ白になりほとんどわからず適当に言ってやり過ごしたことがあります。周りの視線が突き刺さるようで辛かったです。でも、得したなと思ったときがあります。アルバイトを始めたとき、レジの操作方法、商品の位置、お客様への声のかけ方など細かいところまですべてメモを取りました。すると真面目だと褒められました。真面目というよりも、新しいことを覚えることへの「苦手」と「不安」のコンビが常に付きまといていたからなのですが、プラスに働くこともあるのだなと思えました。自分

の苦手を知っておくこと、対処方法を自分で持っておくことで、「不安」は少し和らぐのではないかと思います。また、苦手なことは誰かに助けてもらう。助けてもらえるように自分の出来ることをする。そんな風に思うと、少し楽になるのではないかと思います。

ピーターパンの家では、遊びや作業などを通して、モヤモヤした気持ちや不安を整理したり、苦手なところはその対処法と一緒に考えたりするお手伝いをしています。分岐点に立った時、ぜひピーターパンの家に遊びに来てください。一緒に考えていきましょう。

児童心理治療施設 望みの門 木下記念学園の今

施設長 佐京 正範

着任後八ヶ月が過ぎていきます。どこにも行けない夏を終え、冬を迎えました。

施設の子どもたちは、一年目九名入所、二年目十一名、三年目十四名、四年目十七名、そして今年五年目、四月からこれまで六名の子どもを迎え、二十二名の大きな所帯となりました。入所の進め方は開設後初となるペースであり、職員の困惑も生きました。しかし、暮らしの文化が形成されつつある今、職員の実成長が目に見える今、千葉県でたった一つで

ある心理治療施設の歯車を動かさねばと判断したところで。

小さな集まりから大きな集団へと変化し、学校生活や施設行事の活気と喧嘩はこれまでにないほどです。暮らしぶりも、子どもの大きな笑い声が響き、ほぼ毎日子どもの怒った声が聞こえ、時折物の壊れる音がする。そんな日々です。

子どもたちのことばや行動を追い、何故こんなことを言うんだろう、やるんだろうと、これまでの生き様に思い馳せることから私たちの支援は始まります。実は今入所している子どもの八割以上が発達障害(疑い含め)と診断されています。生きにくさを抱えています。ここに来るまでの家や他施設の中で、どれほど大人を悩ませたか、思い馳せきれないほどの症状を表し、苦しみ暮らしているのが木下記念学園の子どもたちです。私たちはこの育てにくい子どもたちに向き合う使命を担っている一方、知識や技術が伴わないと治療支援は止まり、混乱を進めるだけです。知識や技術は施設内では補いきれず、研修や外部講師からいただく情報を取り入れることが不可欠となっています。加えて、療育を行うチーム支援が求められています。構造化と言われるズラさない支援です。

そのために、子どもの目に入る大人の姿や耳に入れることばを統一しようとしています。

難しい道のりでもやるしかない。それが子どもたちへ応える責任だと思っています。

これまでも、今も、職員は一所懸命に仕事しています。私が発する判断を咀嚼し、子どもたちへ応えています。

施設長の判断は全体の動きを方向付ける大枠であって、その枠内での職員それぞれの行動は、当然各人の判断に委ねられます。ミスをしたくない、命じなければ一挙手一投足もしない、出来ないというのは曲解です。

社会人として自立は基より、この施設で働く職業人として自律を求めるのは、大人を見抜く子どもたちがいるからです。今、自律した大人と難しいチーム支援を本格的に求めています。イメーজに向かい職員それぞれが辛い合いながら進むことを願っています。



望みの門教会だより

「クリスマス」の讃美歌

チャペル委員 神田 督

教会に行ったことのない方でも、一度は口ずさんだ経験があるクリスマス讃美歌は「きよしこのよる」ではないでしょうか。

漢字で表すと「清し」ではなく「聖し」です。原曲はドイツで一八一八年に作詞・作曲されたそうです。

日本語訳は、由木康牧師によるものが最も親しまれていると聞いています。新約聖書「ルカによる福音書二章八〜一四節」を読みながら賛美されることをお勧めいたします。

クリスマス讃美歌ではありませんが、讃美歌の金字塔と言われているのが「アメージンググレース」です。「願ってもみなかった神様からの恩寵」の意が込められています。これからの季節に合わせて是非賛美してみてください。

メリークリスマス!



望みの門学園 及びデイサービス等 建て替え工事について

本年三月、私たちが長年祈り求めてきました新しい建物の工事が始まりました。海に近く軟弱な地盤の上に建てられるため、長さ三十五mの杭を三十九本地中に打ち込み建物をしっかりと支えます。一階はデイサービスセンター、訪問看護、介護ヘルパーステーション等地域の皆さまへのサービス拠点として用いられます。二・三階は望みの門学園。四階は地域交流スペース、厨房。五階は東京湾や富士山を一望できる屋上スペース。また、地震の際は津波の非難タワーとして地域の皆さまに開放します。設計のUCA都市建設設計様、施工の松栄建設株式会社様には安全で丁寧な仕事ぶりで工事を進めて頂いています。この夏、心配していましたが台風の影響もなく一安心しております。来年六月には無事工事が完成しますようお願いのうちに覚え下さい。

望みの門学園
園長 田尻 隆



⑨ 10月13日 1階土間スラブ配筋工事



⑥ 8月31日 基礎型枠工事



① 3月31日 伐採伐根作業



⑩ 11月17日 2階柱圧接、壁配筋工事



⑦ 9月18日 鉄筋足場解体工事



② 4月28日 きれいに整地されました



⑪ 2021年6月30日 完成予想図



⑧ 9月30日 千葉県による現地検査



③ 5月12日 起工式



④ 6月29日 35mの杭を39本打ち込みます



⑤ 8月4日 根切り(基礎工事)作業

編集後記

初冬である。狭庭の柿の葉も赤くなり、今朝は四、五枚しかついでいない。収穫感謝日が過ぎ、次週は第一待降節である。「光陰矢の如し」と古人は言った。さて、法人は創立六十周年が視野に入ってきた。迎える職員は夫々に感慨がある。

六十年は還暦である。或いは本封還りとも言う。つまりは昔の十千十二支に起因した表現でもあろうか。いずれにせよここらで過ぎ来し方を振り返り未来を遠望するよき機会である。六十周年記念事業を通底する言葉は「地域・感謝・未来」である。

(Y・I)